

E. チメッドツェレンがD. パグマDRAMを記述した意義

今岡良子

写真1 D.パグマDRAM



1905～07年、現在のウランバートル市マイマー・ホトに生まれた。1920年代に西欧に留学した時に撮影した写真。モンゴル女性連盟の最初の代表、国会議員、憲法草案委員
出典：<https://sonin.mn/news/culture/123359>
「1924年：モンゴル領事館女性連盟を設立した歴史」2021年8月2日付け

写真2 E.チメッドツェレン



1924年ドルノド県に生まれた。
1960年代に北京大学に留学する頃の
写真
モンゴル国立大学歴史学教授。女性
史家。

はじめに

写真1の薄いワンピースを着て、ハイヒールを履き、足元で控えめに足を組んでいる女性は、D.パグマDRAMと言う。これは1920年代の写真である。モンゴル人の多くは、彼女のことを「偉大なる国民の文豪D.ナツァグドルジがロシア人のニーナ・チェストカワと結婚する前に結婚していた妻」として認識している。筆者は、文豪の最初の妻というよりも、写真2のE.チメッドツェレンの著書『モンゴル人民共和国における女性を社会的抑圧から解放した歴史的経験』（以下『女性解放史』と略す）に書かれた、「モンゴル女性連

盟」の初代代表として認識していた。その本の「第6章 モンゴル女性組織、第1節 革命初期と女性組織」の冒頭を資料1として次に示す。

資料1

モンゴルの労働女性の啓蒙、彼女達の政治・社会活動への参加に女性組織が重要な役割を果たした。

1924年3月8日に行われたモンゴル人民革命党の中央委員会の会議で女性組織を設立する決定を出し、その規則を作成することを中央委員会の宣伝部に委任した。

1924年3月19日に小学校の教師であるハスナヴチ、バダムリンチン、D.パグマドラムらの女性が会議を開き、モンゴル人民革命党の中央委員会所属の女性部を設立し、それに人民革命党の宣伝部所属の「女性教育課」¹と名づけた。女性啓蒙・教育課の幹部として課長、事務局長、指導員をそれぞれ1人、宣伝員2人を任命し、それ以外に特別理事会を設立した。女性教育課長にD.パグマドラム氏（作家D.ナツァグドルジの最初の妻、E.Ch）が任命され、特別理事会の会員にハスナヴチらの女性たちが選ばれた。モンゴルの女性組織の発起人で初代の女性教育課長D.パグマドラムはモンゴルの女性運動の歴史に重要な位置を占める。

出典：E.チメッドツェレン（1973）『女性解放史』P.224

このように「モンゴルの女性組織の発起人で初代の課長D.パグマドラムはモンゴルの女性運動の歴史に重要な位置を占める。」とはっきり書かれているにも関わらず、一般の人は「偉大なる国民の文豪D.ナツァグドルジの最初の妻」という認識をしている。それは、なぜだろうか？ 本論では、その理由を解き明かしながら、E.チメッドツェレンがD.パグマドラムのことを書いた意義を考察したい。

（1）D.ナツァグドルジから考えてみる

D.ナツァグドルジの作品については、筆者が大阪外国語大学のモンゴル語学科の学生の頃、モンゴル文学の授業で、彼の代表作「わが故郷」を習ったことがある。「モンゴルの近代文学の父」が作った、国民の誰もが愛してやまない詩であり、モンゴル語としても美しいから、と暗唱するよう指導された。しかし、その時、D.ナツァグドルジがどんな人生を送った人であったか、ということを知った記憶がない。

筆者の夫は1970年代にモンゴル人民共和国で生まれ、そこで教育を受け、D.ナツァグドルジの「わが故郷」だけではなく、多くの詩を暗唱するよう指導されたと言う。しかし、D.ナツァグドルジは近代文学の父、モンゴルの偉大なる作家であること以外のことを習っていない、と言う。こういう人は他にも多い。

社会主義時代のモンゴルではD.ナツァグドルジの研究は、作品論が主流であったが、日本では岡田和行、芝山豊²が、文学者の表現の自由や人権の視点から当時のモンゴルでは展開できない分野を切り開いてきた。その岡田が1983年に書いた論文³には、D.パグマドラ

¹ のちのモンゴル女性連盟のこと

² 芝山豊（1994）「ナツァグドルジン・アーナンダシュリーと会って」「モンゴル研究」16号、同著者（2005）「D.ナツァグドルジ「黒い岩」をめぐる」「モンゴル研究」22号

³ 岡田和行（1983）「ダシドルジン・ナツァグドルジと「わが故郷」」、「東京外国語大学

ムがどのような人物か知る手立てがほとんどない、と述べられている。それを資料2として引用する。

資料2

次に、帰国後のナツアグドルジの身に起こった「事件」をいくつかあげてみたい。まず彼は、帰国直後にパグマドラムと離婚し、ロシア婦人ニーナ・ニコラーエヴァナ・チャスチャーコーワと再婚し、アナンダ・シリーという名の女兒を設ける。パグマドラムの場合もそうであるが、それ以上に、このニーナという女性がどのような人物なのか知る手立てはほとんどない。このような彼の個人生活に関わる問題を解明するのは、現状では絶望的と言わざるを得ない。

出典：岡田和行（1983）「ダシドルジーン・ナツアグドルジと「わが故郷」」

岡田は、続けて、ロシア人のD.ナツアグドルジ研究者であり、翻訳者であるK.N.ヤツコヴススカヤ⁴の言葉を引用し、次のように述べている。

資料3

「作家の伝記記述者は、ナツアグドルジの個人生活のこのような面をほとんど開示してくれないので、（筆者注釈：ナツアグドルジとパグマドラムが）別れた正確な期日を述べるのは困難である」という嘆きももつともである。

出典：岡田和行（1983）「ダシドルジーン・ナツアグドルジと「わが故郷」」

この資料より、少なくとも1983年の時点で、日本とロシアのD.ナツアグドルジ研究の第一人者ですら、D.パグマドラムの詳細を知ることができなかったということがわかる。

しかし、前述したように、E.チメッドツェレンは、モンゴル人民革命党50周年記念に出版された『女性解放史』にD.パグマドラムのことを4ヶ所書いている。1つ目は、のちに最初の女性の大臣となったD.ポンツァグが、貧困ゆえに都に移住した時、D.パグマドラムが彼女を自分の家に住ませ、文字を教え、就職させ、黨員として迎え入れたという経緯、2つ目は政府がソ連に派遣した最初の留学生の一人がD.パグマドラムであったこと、3つ目は、彼女が最初に作られた小学校で教員をしていたこと、4つ目は先に引用したように、「女性課」、のちの「モンゴル女性連盟」の代表を務めていたことが書かれている。そして、その10年後に、最後の著書として発行された『モンゴル女性の知識の伝統と進歩の諸問題』にも、先の1、2、3、4つについて書いている。もしかすると、E.チメッドツェレンの著作は出版され、誰でも本屋で買うことができたが、よく読まれなかったのだろうか。あるいは、党政府がD.ナツアグドルジを「近代文学の父」と個人崇拜の対象とし、眩い光で照射したことで、その周辺に影が作られ、D.パグマドラムについて本に書かれていても、読む人は読み飛ばしていたということなのだろうか。

論集」第33号,P.174

⁴ K.N.Яцковская

(2) D.ナツァグドルジとD.パグマドラムがともに生きた人生

写真3の男性がD.ナツァグドルジで、女性がD.パグマドラムである。D.ニャマー⁵やKh.メンドサイハン⁶の著作をもとに、二人の人生が重なり合うところを簡単にまとめておこう。

写真3 D.ナツァグドルジとD.パグマドラム



出典：教養番組『D.パグマドラム。曇った夜空の満月』2016年放送

D.ナツァグドルジも、D.パグマドラムも、1906年に生まれた。

D.パグマドラムは、当時の習慣⁷ボグトログドフ *богтлогдох* により胎児の時に結婚相手が決められ、1920年、14歳の時に、エルデネ・チン・ワンの息子パラムとの結婚を強いられた。しかし、1921年の人民革命によって実家に帰ることができた。

D.ナツァグドルジは、1921年の人民革命の年から兵務省に勤め、革命家の一人D.スフバートルの秘書となる。

1922年にD.ナツァグドルジとD.パグマドラムは、お互いの意志で結婚した。

1924年に人民革命党中央委員会の下に女性の組織が設立され、人民革命党の宣伝部所属の女性教育課と名づけられた。その当時、アムガラン小学校⁸の教師だったD.パグマドラム

⁵ Д.Нямаа (2008) "Их Д.Нацагдоржийн гэргий Пагмадуламын амьдрал, аж төрөл" (D.ニャマー (2008) 『文豪ナツァグドルジの妻パグマドラムの人生』)

⁶ Х.Мэндсайхан (2021) "Пагмадулам" (Kh.メンドサイハン (2021) 『パグマドラム』)

⁷ この慣習による婚姻は、1925年10月30日に人民政府が公布した政令によって禁止となる。

⁸ D.ニャマー (2008) P.40には「部屋は小さく白い建物だった」と書かれている。ウランバートル市内に設立された最初の学校である。

は、女性教育課の最初の代表として選ばれ、その組織が出版する女性向けの雑誌の最初の編集長となる。D.パグマDRAMは18歳であった。

半年後、女性組織の代表は、ヤンジン⁹に代わるが、D.パグマDRAMは、最初の国会イフ・ホルル（大会議：定期大会）の議員に選ばれたあと、国会バガ・ホルル（小会議：常任議員による議会）の議員に選ばれる¹⁰。1924年の11月の国会は、最初の憲法を策定するために開かれるが、その草案作成委員にもなる。

D.ナツァグドルジは、すでに党中央委員会幹部候補であり、この国会では、革命青年同盟中央委員会副議長として祝辞を述べる立場にいた。二人とも新しいモンゴルを切り開く先頭に立つ人材であった。

1925年にロシアに派遣される留学生の中に2人とも選ばれ、最初はペトログラード¹¹に住み、D.ナツァグドルジは軍事政治アカデミー、D.パグマDRAM東洋大学で学んだ。一旦帰国後、2人は日本留学を希望していたが却下され、その代わりに、1926年にドイツ¹²やフランスに派遣される留学生6人の中に2人とも選ばれ、最初はベルリン大学付属ジャーナリズム学校、その後、ライプチヒに移住し、ライプチヒ大学の東洋学者の下で留学生活を送ることになった。写真3は、その頃に撮ったものである。

1929年に党政府は外国で学ぶ学生を呼び戻し、2人は留学を断念し、1931年に離婚した。1932年にD.ナツァグドルジはニーナと再婚し、娘アーナンダ・シリーが生まれるが、彼はその年の5月に投獄された¹³。1936年にニーナは強制的に離婚させられた上に、娘とともにソ連に強制送還された。そして1937年に31歳の若さで謎の死を遂げた。¹⁴

D.パグマDRAMも、D.ナツァグドルジが投獄された後に投獄され、釈放後、ウランバートルの中心から東の外れにある、漢人が集中して住むマイマー・ホトに住んだ。その後、どのような最期を迎えたかということとはよくわかっていない。D.ニャマーは、その著書中でも、「1931年以降D.パグマDRAMは消息を何一つ残していない」¹⁵と書いている。娘のD.ツェレンドラムは「母は1938年に亡くなった」¹⁶と書いている。そうであれば、32歳で亡くなったことになる。

⁹ S.ヤンジマーが二代目の代表を務めたのは、1年後である。

¹⁰ <https://ardmedee.com/24150/>によると、「1924年11月26日に第1回イフ・ホルル（最高機関となる大会議）が開かれ、モンゴルの最初の憲法が策定されることになった。そのイフ・ホルルには、ハルハ4盟（アイマグ）、ドゥルブド2盟（アイマグ）、アルタイ・フブスグルのウリアンハイの旗（ホショー）、ダリガンガ・ホブドの農民の旗（ホショー）、と人民軍から全部で90人が代議員として選ばれ、77人の代表が参加した。その憲法では、イフ・ホルルの議員からバガ・ホルル（常設議会）の議員を30人選んで、日常的に作業に当たることになっているが、その中に1人、選ばれた女性が、D.パグマDRAMであった。」と書かれている。

¹¹ 現在のレニングラード

¹² 当時ドイツは西側で、ヴァイマル共和制国家。1928年から経済が悪化し、1930年の世界恐慌により経済危機が起こり、1933年にA.ヒトラーが政権を握る。

¹³ Д.Намдагийн 1988 онд хэвлэгдсэн “Шинэ Монголын шинэ театр” 『新しいモンゴルの新しい劇場』 <https://gogo.mn/r/dgl3l>

¹⁴ 岡田和行（2006）「ナツァグドルジの1932年の投獄と獄中詩について」『東京外国語大学論集』第72号,P.61

¹⁵ D.ニャマー（2008）前掲書,P.52より引用した。

¹⁶ D.ニャマー（2008）前掲書,P.39より引用した。

このように、D.ナツァグドルジと D.パグマドラムは、その短い人生の、少なくとも 15 年をともに生きたことになる。年数を重ねただけでなく、ともに社会主義建設を推進する党の重要な若手人材として活動し、ともに先進国に留学して祖国の未来を考え、ともに帰国させられた祖国には居場所がなく、投獄され、ともに不遇の死を遂げている。

このような D.ナツァグドルジと D.パグマドラムの人生をたどり、浮かんでくる謎は、モンゴル人民革命党による政治的粛清の中に答えがあることがわかる。これでは、党政府が情報公開し、国民が知ることができるようになるまで、国民も、外国の研究者もよくわからないはずである。党は個人崇拜という方法で、見せたいところにより強い光を照射して、D.ナツァグドルジの実像を見えなくし、その光の影に D.パグマドラムを置いてもっと見えなくしてきたと言える。

(3) 投獄の理由

1930 年代のソ連でスターリンによって行われた大粛清については、よく知られているが、スターリンの強い影響下にあった二番目の社会主義国のモンゴルでも同じことが起こった¹⁷。

1930 年代に、政治的粛清の対象となったのは、先の 2 人だけではない。粛清など現代史研究者の D.ウルジーバヤルによると、37,474 人が粛清の対象にされ、20,000 人が射殺された。この背景には、1921 年の人民革命以降、モンゴル国内は革命派と守旧派の間で内戦状態になる。(1931 年に満州事変が起こる。) 1932 年にモンゴル西部 4 県で反革命運動やチベット仏教の僧侶による蜂起が起こる。それを契機に知識人が粛清されていくが、その中に西側から帰国した留学生たちが含まれた。1933 年に「ルフンベ事件」が起こり、180 人近くが逮捕、粛清された。逮捕の理由は、「反革命分子」「日本のスパイ」であった。(1933 年、大日本帝国は国連脱退。) 1935 年にハルハ川国境を関東軍が緊張させ、1936 年にモンゴルとソ連の間で、相互援助議定書を取り交わし、ソ連・モンゴル軍は日本・満洲軍と戦うことになった。(1937 年に日中戦争始まる。) 1937 年に Kh.チョイバルサンが全軍の司令官となり、また首相代理となり、1937 年から 1939 年にかけて「影に怯え、尻尾に震える」と言われる大粛清が始まった。「反革命分子」「日本のスパイ」容疑で数万人が大粛清の対象となった。資本主義国に留学し、ヨーロッパのリベラルな思想の影響を受けた若者たちが粛清された背景には、大日本帝国の大陸進出が緊張を与えた側面を強調しておきたい。

Ts.ツェツェグジャルガル¹⁸が 2009 年に出版した著書『モンゴル女性の 20 世紀: 変容と変化』から「1932 年から 1940 年に反革命という理由で、28,451 人が冤罪事件で逮捕された」と書いている。この大粛清の流れの中で、ドイツに留学した D.ナツァグドルジと

¹⁷ その詳細については、「アジア現代女性史」13 号に書いた拙著「E.チメッドツェレンの最後の著書を再考する」の 85-88 ページを参考にいただければ幸いである。

¹⁸ 興味深いことに、前掲の拙著には、Ts.ツェツェグジャルガルは、E.チメッドツェレンが記述しなかった粛清の時代を記述している、と書いた。しかし、Ts.ツェツェグジャルガルは E.チメッドツェレンの著作を参考文献のリストにあげているので、女性連盟の創立者の 1 人として、また、ドイツに留学した女性の中に D.パグマドラムに触れている。しかし、D.パグマドラムが粛清の対象になったことは書いていない。参考文献リストには、そのことを書いた文献がないので、当然だろう。

D.パグマDRAMは投獄されたので、「投獄の理由」は彼ら自身にあるのではなく、大粛清を実施した側が作りあげたものということになる。

例えば、D.ナツァグドルジが投獄された理由について、岡田（2006）¹⁹は、D.ナツァグドルジとともに投獄されたD.ナムダグの回想をもとに次の2つにまとめている。1つ目は、「1931年12月31日の大晦日の宴会が実は満洲国成立1周年を記念して開かれたものではないかと内務保安処に嫌疑をかけられたこと。2つ目は、バトオチルが撮影して内務保安処に持ち込んだ写真によって、宴会の場所を提供した「首謀者」と出席者が判明したこと」²⁰である。1989年になり、罪状が再審査された結果、冤罪であることが判明したため、判決は無効とされ、名誉回復がなされた。

D.パグマDRAMは、まず、1931年9月9日付けウランバートル市の選挙管理委員会の決定により、貴族（D.ナツァグドルジ）の妃であり、彼は私的な使用人を所有するタイジであることから、選挙権と被選挙権を剥奪された。1931年9月9日にカレッジの第45号決定により、就学中に、年下の者を抑圧し、常に凶暴な性格で、猥褻な行為をしばしば行い、貴族やタイジ²¹の女となり、学問に熱心に取り組まなかったという理由で、退学させられた。1932年モンゴル人民革命党の第三回調査の結果、党からD.パグマDRAMは除名された。また、女性課に勤める権利を剥奪するという党の決定が出た。それが冤罪であることをスフバートル区民事裁判所が認め、2019年12月13日に名誉を回復すると決定²²した。

こうして、モンゴル政府は、2人とも冤罪であったことを認め、公式には名誉を回復したことになる。

¹⁹ 岡田和行（2006）前掲論文,PP.61-70

²⁰ 岡田和行（2006）前掲論文,P.63

²¹ 下級貴族で、役人

²² Kh.メンドサイハン（2021）前掲書,P.123

(4) 知識人による名誉回復の動き

写真4 映画「輝く草原の祝詞」のポスターに使われた写真



出所：「スクリーン」

<https://www.delgets.com/2023/01/1984.html>

D.ナツァグドルジは、死後、1948年の第1回モンゴル作家大会で「絶大な評価が与えられ」²³、個人崇拜が始まったと言われる。1956年にモンゴル人民革命党政府の主導により生誕50年祭が盛大に行われ、1963年にはウランバートル市内に銅像が建てられ、1984年にD.ナツァグドルジを讃える「輝く草原の祝詞」‘Саруул талын ерөөл’²⁴という映画が作られた。10年ごとに生誕祭が行われ、「近代文学の父」として光を当てられ続けた。それでも、公式に名誉回復が行われたのは、1989年になる。

一方、D.パグマドラムの名誉回復は2019年に行われた。こんなに時間がかかったのは何故か、D.ナツァグドルジに遅れること30年、この時差は、いったい何なのだろうか。

また、裁判所が公式にD.パグマドラムの名誉を回復する判決を出した後、記者会見は行われておらず、一般の人にはあまり知られていないどころか、彼女の名誉を毀損する様々な噂はい

まだにその名前にまわりついている。これは、いったいどういうことなのだろうか。彼女が女性であったからなのだろうか。

これに対し、モンゴルの一部の知識人は、すでに地道な努力を続け、汚名を返上しようとしてきたので、その経緯を紹介していきたいと思う。

2007年、モンゴル国営放送が放送40周年記念に、巨匠G.ジグジドスレンを監督に『文豪ナツァグドルジ』²⁵というドラマ仕立ての特集番組を放送した。これが2人の粛清について初めて映像化した番組と思われる。ここでは、粛清後の生活の必要から、D.パグマドラムが漢人から借金をし、愛人になったことが描かれている。2007年は、D.パグマドラムが生まれて100年目の年になるので、D.ニャマーは、ウヌードゥル新聞に‘Нэгэн зууны даваан дээрээс нэхэн сурвалжлахын учир’（100年の年月が過ぎても、伝えなければならない理由）という投稿をし、D.パグマドラムについて議論するようになる。

2008年に文学評論家のD.ニャマー²⁶が、D.パグマドラムに関する関係者の証言を集めた『文豪ナツァグドルジの妻パグマドラムの人生』²⁷を出版した。これを契機に、新聞や

²³ 岡田和行（1983）前掲論文、P.183

²⁴ 「輝く草原の祝詞」‘Саруул талын ерөөл’（1984）

²⁵ “Их Нацагдорж” 『文豪ナツァグドルジ』 国営放送のカラー放送40周年記念番組として2007年に放送された。 <https://www.youtube.com/watch?v=5z1GqRyt0IU>

²⁶ 文芸評論家D.ニャマー：1939年ドンドゴビ県生まれ、2017年9月に死去。国家勲章、文化功労者、詩人、医師

²⁷ Д.Нямаа（2008）“Их Д.Нацагдоржийн гэргий Пагмадуламын амьдрал, аж төрөл”（D.ニャマー（2008）『文豪ナツァグドルジの妻パグマドラムの人生』）

テレビが D.パグマドラムについて積極的に取り上げるようになる。また、同じ年にモンゴル女性連盟が出版した“Монголын эмэгтэйчүүдийн байгууллагаа”（『モンゴルの女性組織』）²⁸には、この組織に関わった女性達を紹介している。この中で、D.パグマドラムは、最初の代表として紹介されているが、「5,6 才の時、モンゴル文字と満洲文字をウーレン・アーと言う人から学んだ」ということから始まり、最初の留学生であることなど、簡単な略歴が書かれている。しかし、その最後の一文に「この女性の個人史について十分に研究されていない」と書かれている。

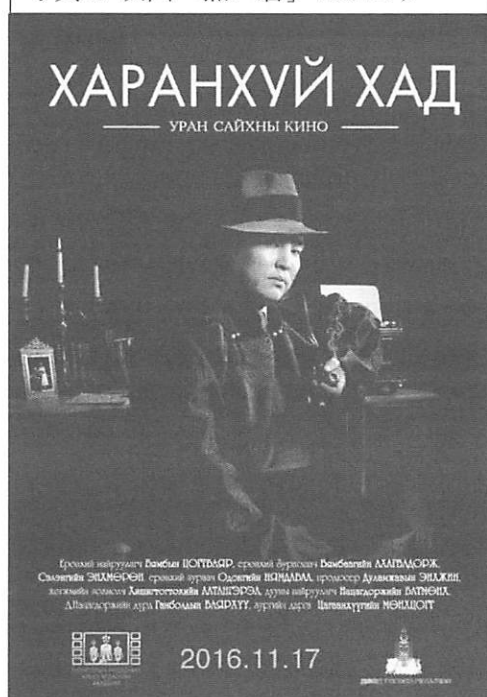
2013 年には、前述の D.ニャマーの著作を元にして D.パグマドラムを主人公とする再現番組『D.パグマドラム。曇った夜空の満月』²⁹が作られた。（7）で詳しく述べる。

2015 年に歴史学者 Kh.メンドサイハンらが、D.パグマドラムの名誉回復の申請をウランバートル市スフバートル区、チンゲルテイ区、バヤンズルフ区の民事裁判所に提出した³⁰。そこでは埒があかず、2019 年 5 月には高等裁判所に申請をし、最終的には、2019 年 12 月に公式に名誉回復をした。

2016 年に D.ナツァグドルジの生誕 110 周年を記念した映画や演劇が制作された。映画では、D.ナツァグドルジの著作「黒い岩」と同じ題名の映画「黒い岩」³¹が制作され、2017 年 2 月に劇場公開された。詳しくは（6）で述べる。また演劇では、2016 年 11 月に Sh.グルバザル作、Ch.トゥブシン演出による「昇らぬ太陽」が初上映され、Ts.ホラン作、B.バートル演出による『モンゴル人民の巨匠』という劇が公開された³²。この 2 作とも、2 人が粛清の対象となったことが描かれ、D.パグマドラムは教養の高い女性として描かれている。

2016 年に写真集『モンゴル人たち：1924-1959 年』第 2 巻³³が発行され、ドイツやフランスに留学した若者達の集合写真の中に D.ナツァグドルジと D.パグマドラムが含まれている。また、ドイツ留学前の 1920 年に演劇活動をしている衣装の

写真 5 映画「黒い岩」のポスター



出所：モンゴル映画サイト

<https://kinosan.mn/content/1786>

²⁸ Н.Гэрэлсүрэн, Д.Алтай (2008) “Монголын эмэгтэйчүүдийн байгууллагаа”, УБР.165 (N.ゲレルスレン、D.アルタイ (2008) 『モンゴルの女性組織』、ウランバートル、P.165)

²⁹ “Д.Пагмадулам. Бүрхэг шөнийн тэргэл саран” 『D.パグマドラム。曇った夜空の満月』 <https://www.youtube.com/watch?v=EuQk79u-O54&t=2029s>

³⁰ Х.Мэндсайхан (2021) “Пагмадулам”, P.121

³¹ “Харанхуй хад” 「黒い岩」 監督 В.Тюгтубаев, D.ナツァグドルジ役 G.Баялфур

³² “МОНГОЛ АРДЫН СУУТ” <https://news.mn/r/749934/> D.ナツァグドルジ役 Ts.Түелендрэг, D.パグマドラム役 М.Энфзага

³³ О.Батсайхан (2016) “Монголчууд：1924-1959 онд” АДМОН принтинг, P.155 (O.バトサイハン (2016) 『モンゴル人たち：1924-1959 年』 アドモン社, P.155)

ままの D.パグマドラムの写真が掲載されている。

2020 年 7 月のナーダムの前に、D.ナツァグドルジが座り、D.パグマドラムがそばに立つ 2 人の写真を元にした銅像が、エルデネト市で建立され、公開された。この記事には、偉大なる作家 D.ナツァグドルジ、その妻であり、女性連盟の最初の代表 D.パグマドラム³⁴と書かれている。

その後、2021 年には「モンゴルの 100 年の歴史を創った 100 人の女性たち」³⁵というシリーズの番組で「光を見て、光り輝いた純白の真珠 D.パグマドラム」という輝かしいテーマが付けられ、モンゴル女性連盟の最初の代表として紹介された。若者達は、彼女が満洲語、漢語、ロシア語、ドイツ語を身につけていたと聞き、1920 から 30 年代にそんな国際的な教養人がいたことに羨望の眼差しで見ている。歴史学者 Kh.メンドサイハンが自分の博士論文を元にした『パグマドラム』³⁶という本を出版したことで、新聞が再び取り上げて広めた。

(5) 映画「黒い岩」の中の D.パグマドラムの描かれ方

1984 年に D.ナツァグドルジを讃えた「輝く草原の祝詞」'Саруул талын ерөөл'³⁷という映画が作られた。地方に社会主義建設を進めるために、全力投球する D.ナツァグドルジに対し、自由奔放な D.パグマドラムが「かまってくれない」と困らせ、それが原因で別れ、任務を果たした D.ナツァグドルジが民衆に絶賛される姿を見て、後悔の涙を流す。D.パグマドラムは悪役となっている。

これと比べて映画「黒い岩」では、2 人とも粛清の対象となり、その苦悩が描かれていることが根本的に違うところである。

D.ナツァグドルジが投獄され、勾留されているシーンから始まり、取り調べを受けるシーンで、取調官から「タイジ ナツァグドルジ」と呼ばれ、「チンギスの血統を受け継いだ貴族なのか」と詰問され、暴行を受ける。意識が朦朧とする中で、勾留されている間、子どもの頃、初めてパグマドラムと出会った時のこと、妻ニーナとの暮らし、娘のアーナンダ・シリのいい父親ぶり、別れた D.パグマドラムを心配してマイマー・ホトを訪ねたことなどを思い出す。その時の D.パグマドラムのセリフには次のようなものがある。

D.パグマドラムは「例の偉大なる作家 D.ナツァグドルジの D.パグマドラムってのは、麻薬中毒になり、漢人と組んでろくでもないことをして捕まったと言われている。」と苦しい胸のうちを話す。

D.ナツァグドルジは「それが本当であれば、と望む人もいるんだろう」と落ち着いて言う。

³⁴ <https://www.montsame.mn/jp/read/231064>

³⁵ 番組名は "Зууны 100 эмэгтэйчүүд"（「モンゴルの 100 年の歴史を創った 100 人の女性たち」）。この番組で E.チメッドツェレンが取り上げられ、その内容について、筆者が 15 号に「モンゴル国の番組「100 年の 100 人の女性たち」の中の E.チメッドツェレン」にまとめている。

³⁶ "Пагмадулам" 『パグマドラム』

³⁷ 「輝く草原の祝詞」'Саруул талын ерөөл' (1984)

D.パグマDRAMは「党の会議で、女性が政治や社会に参加する権利を主張した私が、今や、選挙権を奪われ、仕事に就く権利も奪われた。」と涙をこぼす。

D.ナツァグドルジは「泣かないで、落ち着いて」と宥める。

D.パグマDRAMは「どうしたら落ち着けるの？ 私は全てを失った。今の私には何もない。」「刑務所でタバコを覚えたわ。それを、みんな、麻薬をやっているとか、老耄の漢人の愛人になってるとか、色々言われている。どうして、みんな私を貶めるの？ 私はただ一人の女性にすぎないのに。」「私たちが行ったロシア、ヨーロッパはどうだった？ みんな優しくあったわ。私たちはそこで多くのことを学んで、それをどう実践するかを考えて、祖国に帰ってきた。その祖国は私たちに何をした？」と涙ながらに訴える。

これらのセリフには、D.パグマDRAMだけでなく、汚名を晴らしたい人々の思いも込められている。次の(7)で詳しく述べる。

写真6 D.パグマDRAMが最初に登場するシーン



出所：映画「黒い岩」(2016年)

写真7 D.パグマDRAMが二番目に登場するシーン



出所：映画「黒い岩」(2016年)

写真6は、D.ナツァグドルジを連れて父が学問の師匠を訪ねた時、すでにD.パグマDRAMがそこで学んでいて、漢語や満洲語に長けていると師匠が紹介するシーンである。

写真7は、D.パグマDRAMが二番目に登場するシーンである。白いブラウスを着た清楚なD.パグマDRAMが演出されている。

このように、D.パグマDRAMの汚名を覆す取り組みは、このままにされてはいけないう一部知識人によって、機会を捉えて地道に続けられ、新聞やテレビの番組を通じて報じられてきた。それでもなお、一般市民には十分に伝わっていない。

E.チメッドツェレンは、D.パグマDRAMの人となりについて、当時の証言を紹介して次のように記述している。

資料4

「パグマDRAMは当時、教養のある女性の1人であったが、5、6歳からモンゴル文字と満洲文字を習い、中国語の会話が上手だった。1926年にソ連の東洋大学で短期間勉強していたが、同時に、彼女の夫である作家ナツァグドルジが軍事大学に留学していた。そこでロシア語を取得したが、まもなく2人はドイツのベルリンへ行き、そこで6ヵ月ドイツ語を勉強してから、ライプチヒ市の記者大学へ進学し、1929年まで勉強した。D.パグマDRAMとD.

ナツァグドルジの親友のソドノムが『1930年の夏にパグマドラムとウランバータル市で会った時、彼女はもうヨーロッパの女性のように落ち着いていて、学識豊富で視野の広い、高い教育を受けた女性になっていた。パグマドラムと話すといつも元気で対応してくるが、性格がおとなしく、正直で口数の少ない人であった』³⁸と回想している。

パグマドラムは文学が好きで、モンゴルの古典文学をモンゴル語と満洲語で読んでいた。彼女は伝統的な文化と近代的な文化の全般について、よく流暢に語り、その素晴らしさを皆と分かち合っていた。モンゴルの女性に最先端の科学や文化を教え、知的な武装をさせ、様々な専門的な人材を育てるために一生懸命務める必要があると考えていたからだ。そのために、まず、読み書きから始めて、女性の日常生活と結び付け、言葉や行動にも影響を与え、誠実で、慎重で、清廉で、的確な人材を教育するよう心がけるべきと常に述べていた。

人民政府の初期の頃から D.パグマドラムが女性と若者を対象に様々な活動を行ってきたが、政治について高い知識を持っている人だった。...パグマドラムはロシア語、ドイツ語、満洲語、モンゴル文字、中国語が上手な教養のある人であった」と1967年3月付けの《モンゴルの女性》誌に書かれたパグマドラムの伝記から引用した。

出典：E.チメッドツェレン（1973）前掲書、P.225より

このように書かれた文章が記憶に残るよう読まれていないことが残念である。のちにモンゴル女性連盟や Ts.ツェツェグジャルガルが、D.パグマドラムについて略歴を書く時、この文章が下敷きになっている。

映画「黒い岩」の主人公は D.ナツァグドルジであるため、ここに書かれたように女性解放運動のリーダーとしての D.パグマドラムが描かれておらず、悲劇の運命を背負わされた女性として描かれている。

（6）再現番組『D.パグマドラム。曇った夜空の満月』の中で知識人が伝えたかったこと

この番組の中で、知識人の語ったことの一部をここに紹介する。どの人も、死んでもなお汚名を着せられる D.パグマドラムについて忸怩たる思いを抱えていることがわかる。

①P.バダルチ：モンゴルの人民作家、文化功労者、詩人

写真 8 P.バダルチ



出所：「曇った夜空の満月」

P.バダルチ³⁹は、「こうして全否定して、D.ナツァグドルジ生誕 50 周年以降、誰も D.パグマドラムを思い出すことすらしなくなった。」⁴⁰、「D.パグマドラムというと、一時的に D.ナツァグドルジと結婚していた。マイマー・ホト育ちで、シャンズ（三味線）を演奏する飛んだ女。最期には、漢人集落に住み、漢人の愛人になり、麻薬を吸い、という不名誉な噂がつけられ、それは今も変わらない。」「(D.

³⁸ Базаргочоо. Курсийн ажил. 1971 он. УИС-ийн МАХН-ын түүхийн тэнхимд бий.

³⁹ P.バダルチ- トップ県で1939年に生まれた。モンゴルの人民作家、文化功労者、詩人。

⁴⁰ 1時間5分以降

ナツァグドルジについて) 立派な本を出している学者はたくさんいるにも関わらず、D.パグマドラムについて口を閉ざしている人は多い。私が話を切り出すと、お前、何なんだと嫌な顔をする。今さら話しても無駄だとか、あんたの書いていることは嘘だとか、私にそう言って話を止める。私はD.パグマドラムに金をもらったわけでもないし、兄弟や親戚でもない。何が起こったのか、事実を語りただけだ。」⁴¹

②D.ニャマー：国家勲章受賞者、文化功労者、詩人、文芸評論家、医師。『文豪ナツァグドルジの妻パグマドラムの人生』の執筆者

写真9 D.ニャマー



出所：「曇った夜空の満月」

D.ニャマーは、「西側に留学した若者は粛清され、B.リンチンのようにロシアに留学した若者は粛清されなかった。」、「当時のモンゴルで、女性が大きな会議に参加し、自分の意見を言うということは、まだ受け入れられない状態にあった。」、「D.ナツァグドルジを研究する人はたくさんいる。長年研究してきた人はよく知っている。(暗い部分を)話す人もいるが、話さない人もいる。」⁴²

③ Ts.トゥメンバヤル

写真10 Ts.トゥメンバヤル



出所：「曇った夜空の満月」

Ts.トゥメンバヤル⁴³は、「モンゴル女性連盟の最初の代表の名前は長い間伏せられてきた。現在の女性連盟の代表J.エルデネチメグがD.パグマドラムの名前を言うようになったのは最近のことです。」⁴⁴と語っている。

確かに、2018年の「ウヌードゥル」新聞にモンゴル女性連盟の代表J.エルデネチメグのスピーチが掲載され、その中に、「

モンゴル女性連盟は、1924年に「女性教育課」という名前で設立され、モンゴルだけでなく、アジアで最初の女性の組織が設立されたという歴史がある。偉大なる作家D.ナツァグドルジの妻D.パグマドラムはこの組織の責任を持つ最初の代表でした。当時女性を啓蒙する、社会や政治に参加させるなど、当時の女性の権利を守り、充実させる目的で最初設立された。⁴⁵」と述べている。

しかし、繰り返しになるが、E.チメッドツェレンがD.パグマドラムのことを『女性解放史』に記述している。やはり、この本はよく読まれていなかったのだろうか？

⁴¹ 1時間25分以降

⁴² 1時間22分以降

⁴³ Ts.トゥメンバヤルは、作家、記者

⁴⁴ 1時間20分以降

⁴⁵ 2018年10月11日付けのウヌードゥル新聞

④Ch.ビレグサイハン：文学研究者

写真 11 Ch.ビレグサイハン



Ch.ビレグサイハンは、「D.ナツァグドルジが死去した後、D.パグマドラムについて話したい人間は一人もいなくなった。当時の知識人は、語ってはいけないリストに署名をさせられていて、その1つがD.パグマドラムについてだった。他の偉大な作家たちも、彼女について書こうとはしなかった。」「(二人の)関係者はたくさんいて、知っている人は多くいるが、語ろうとしない。私たちの世代が死んでから、明らかになるんだろう。」

46

⑤司会者は、「モンゴルの女性を最も侮辱する言葉は、「漢人の愛人になった」という言葉である。」「D.パグマドラムは汚名を着せられていた。」と述べた。

⑥「D.パグマドラムの名誉を回復しよう。」

この番組の内容を放送後に紹介した TIME 紙⁴⁷の記事には、「曇った夜空の満月」には、「モンゴルの女性組織の最初の長、新しい憲法を作った人にこんなにも汚名を着せ、侮辱し、記憶から抹殺し、煙に巻く理由はいったい何なのか。こんなことになる科学、党や政府、そんな女性組織が一体モンゴルにあるのだろうか。彼女に貼られた「モンゴル人を侮辱する中国人と結婚したモンゴルの女」というレッテル。しかし、時代が変わったので中国人どころか、悪魔と結婚したとしても名誉回復される時代になったが、その権利を放棄したのか。現在までも私たちはこんな理解のままで、目をつぶり、耳をとじ、何年もの年月を過ごしてきた。」「私たちはパグマドラムやツェレンドラムの名誉を回復しよう」と呼びかけて締め括った。

(7) 1973年に E.チメッドツェレンが資料と証言を元に書いた D.パグマドラム

さて、この D.パグマドラムの名誉回復の取り組みは、いつから始まったのかと、遡って見たところ、文学評論家の D.ニャマー⁴⁸が引用した文献の中に、1973年に発行された E.チメッドツェレンの著作『女性解放史』があった。それは、本論冒頭の資料1である。つまり、E.チメッドツェレンが D.パグマドラムを記述したことが、その後、政治的粛清とその時に纏わされた汚名から名誉を回復する運動のきっかけとなったと言える。

⁴⁶ 1時間20分以降

⁴⁷ <http://time.mn/k0n.html>

⁴⁸ D.ニャマーは、1939年、ドンドゴビ県生まれ、2017年に亡くなった。詩人、作家であり、文学評論家。モンゴル国家勲章、文化功労勲章受賞者。D.ナツァグドルジ、D.パグマドラムを直接する人にインタビューし、2008年に“Их Д.Нацагдоржийн гэргий Пагмадуламын амьдрал, аж төрөл”（『文豪ナツァグドルジの妻パグマドラムの人生と業績』）を出版した。近代文学の父と呼ばれる D.ナツァグドルジを研究する人は、モンゴル内外に数え切れないほどいるが、D.パグマドラムの名前を題名につけた本は、これが初めてである。

最初に資料1で引用したように『女性解放史』の中では、D.パグマドラムが「モンゴルの女性連盟の発起人で初代の課長 D.パグマドラムはモンゴルの女性運動の歴史に重要な位置を占める。」ことが書かれている。

その本の中には E.チメッドツェレンがモンゴルの最初の女性の大臣 D.ポンツァグにインタビューし、自分を解放してくれたのはD.パグマドラムであるという証言を書いている。

写真12が、D.ポンツァグである。彼女は1900年にセツェン・ハン・アイマグのエルデネ・

写真 12 D.ポンツァグ



1900年、ヘンティー県に生まれた。
モンゴルで最初の女性の保健省大臣
(1930～1933年)

ダライ・ワン旗（現在のドルノド県フルンビイル郡）のヘルレン・バヤン・ハン・オールというところでシャラブの3番目の娘として生まれた。彼女は幼い時に養女に出されたが、16歳になってから実の母親のところに戻ってきた。その後、一度も会ったことがない人と婚約を決められ、嫁に出された。まもなく夫は、他の家に遊びに行くようになった。エルデネ・ダライ・ワン旗の貴族の妻が都のフレーへ行くことになり、彼女について行き、その家で住み込みの重労働をすることになった。少し長くなるが、D.ポンツァグの証言を資料5として引用する。

資料5

「私はある日、通りを歩いていたら、偶然に、同郷の女性 O.ジャムスランと会った。彼女はずいぶん前から革命を支援していたと人々がよく話題にしていた。O.ジャムスランは私のぼろぼろの服を見て「あなたに紹介してあげる家族があるからついて来て」と言い、私は彼女について行った。そうして私を D.ナツァグドルジの家に連れて行った。さらにご馳走してくれた。すると O.ジャムスランは「パグマドラムよ！ 私は同郷の人を連れてきたけれど、彼女はウルジーナムスライの家で使用人として使われて、着る服もなく苦勞しています。だから、彼女に入党してもらったらどうですか」と言った。パグマドラムはノートを持って、メモを取り始めました。

「お名前は？」と聞かれて、「ポンツァグ」と答えた。オボグを聞かれても何のことか分からなかったので、隣にいたジャムスランが「お父さんの名前を聞いているのよ」と教えてくれました。私は父を幼い時になくしたことを伝えたら「お母さんのお名前は？」と聞かれ、「ドルゴル」と答えた。そうして、ドルゴル・ポンツァグと言う姓名を登録してもらった。こうして私は生まれて初めて自分のことを書いてもらい、社会に参加する入り口に立ち、人口登録帳にも1人の国民として登録することができた。

その時、私は24歳になっていた。D.パグマドラムは私に「明後日会議があります。これ

からあなたは党に入党し、自分で自分を成長させるようになります。勉強もたくさんありますよ」と言った。私はとてもうれしかった。私が入党するに際して、D.パグマドラムや党大学の教師であるチョイスレン達は保証人になってくれた。そして翌々日になると（これが1924年6月15日だった）財務省の傍らにある党の細胞で会議が開かれ、入党させてくれた。党の細胞長はS.ボヤンネメフ⁴⁹であった。こうした縁で私は党と結ばれたのです」と話した。

D.ボンツァグは、我国の近代文学の基礎をつくった人である D.ナツァグドルジに縦書き文字のアルファベットを教えてもらい、読み書きを覚え、さらに D.ナツァグドルジの弟子として家に住むようになった。このようにして D.ボンツァグは不自由で貧乏な使用人の生活から解放され、人民革命の日を迎えたのである。

D.ボンツァグは、その時の自分のことを思い出し、「パグマドラムは1924年に私を軍事工場で働くことができるようにしてくれました。私は初めて社会に参加することができた。その頃、私達は軍用外套をよく作っていた」と話した。

出典：E.チメッドツェレン（1973）『女性解放史』,P.42

ここには、D.ボンツァグが貧困ゆえに田舎から都に流れついて、D.ナツァグドルジとD.パグマドラムの暮らす家に住み込み、文字を習い、工場で働き、入党し、政治活動に参加していく様子が生き生きと再現されている。この記述を文学評論家のD.ニャマーは引用していたのである。前述した再現番組にも、最初の大員 D.ボンツァグの証言として挿入されていた。

筆者は、社会主義時代の多くの研究者と同様、E.チメッドツェレンも人民革命党の「体制内で出世した知識人」であるという穿った見方をしていたが、彼女自身が政治的粛清の被害者であった⁵⁰ことを本誌14号の「2つの三世代の『秘史』」で明らかにした。また、13号の「E.チメッドツェレン最後の著書『モンゴル女性の知識の伝統と進歩の諸問題』を再考する」の中で、「E.チメッドツェレンは、粛清の負の側面については一切記述せず、それを書くことを許されない時代であった。」⁵¹と書いた。確かに、彼女は自分自身の家族とブリアート民族が受けた粛清について書くことはなかったし、粛清の負の側面については一切記述しなかった。しかし、粛清の対象となったD.パグマドラムについて、その功績を記し、名誉を毀損する噂を打ち消す時に根拠となる証言を『女性解放史』に刻印していたのである。

この本が出版された1973年は、まだ政治的粛清が続いていた。1930年代の大粛清は、I.V.スターリンの影響下のモンゴルで、大日本帝国の侵略に怯えつつ、Kh.チョイバルサンが全権を握る中で行われた。その後も断続的に粛清は行われていったが、この頃は、スターリン批判の影響を受けることになる。

⁴⁹ S.ボヤンネメフ（1902-1937）作家（詩歌や短編小説、戯曲、文学理論）、政治家。1937年に粛清された。

⁵⁰ 14号には「2つの三世代の「秘史」－E.チメッドツェレンの「三世代の歴史」と息子のJ.ボルの「私の母 思い出」

⁵¹ 今岡良子（2019）「E.チメッドツェレン最後の著書『モンゴル女性の知識の伝統と進歩の諸問題』」、『アジア現代女性史』第13号、P.87

1956年にソ連でN.S.フルシチョフがI.V.スターリン批判を始め、中国では共産党への批判を歓迎する「百花齊放百家争鳴」が始まり、モンゴル人民革命党政府は、モンゴルの知識人がこの影響を受け、自由に政治批判することを恐れた。この時代の粛清のことは「知識人の迷妄」と呼ばれ、たとえば、表現の自由を奪われたことで有名なR.チョイノム⁵²という詩人が逮捕されたのは、1969年である。市民は粛清の対象者に対して距離を置く時代であった。党の下で歴史を書く時、党によって粛清された人を記述することは非常に難しいことだったはずである。夫のD.ナツァグドルジは、すでに個人崇拜の対象として日のあたる世界に存在していたが、党がなぜD.ナツァグドルジを投獄したのか、という陰の部分の解明は、33年後の1989年の公式な名誉回復まで知ることを許されなかった。そういう時期に、E.チメッドツェレンは、D.パグマドラムを積極的に取り上げようとした。それはなぜだろうか。一人息子のボルに聞いた時、（粛清に対し）「母は勇気ある人だった」とだけ答えてくれ、それ以上の言葉はなかった。彼女の同僚の研究者や弟子となった研究者らに聞いても、それについて話してくれる人はいなかった。

(8) 写真のない女性連盟の代表 D.パグマドラム

D.パグマドラムについて記述することは、そうたやすいことではなかったという根拠として、写真の扱い方が不自然であることを指摘することができる。

E.チメッドツェレンには、D.パグマドラムを女性解放の歴史における第一人者として書かねばならない動機があった。にもかかわらず、D.パグマドラムの写真が1枚もないのは、非常に不自然である。本論の最初に写真1として示したように、D.パグマドラムの写真は当時存在していたし、娘のD.ツェレンドラムが保存していた。

この本の中では、女性活動家の個人と集合写真、合わせて19枚の写真が挿入されていて、例えば、S.ヤンジマーの写真は、1ページを使って、読者が最初に見るように編集されている。この時代の印刷物で、このサイズで挿入される写真は、V.I.レーニンやD.スフバートルなどの国を代表する革命家や国家元首の写真に限られている。本来は、ここには、S.ヤンジマーではなく、まず、D.パグマドラムの写真が挿入されるべきであった。D.パグマドラムの記述が複数ありながら、彼女の写真が1枚も挿入されていないのは、編集上、削除された可能性がある。

⁵² 岡田和行(1991)「反逆の詩人レンチニー・チョイノム」『東京外国語大学論集』第42号、PP.201-223

写真 13 『女性解放史』に挿入された S.ヤンジマーと S.オドバルの写真



出典：E.チメッドツェレン（1973）『モンゴル人民共和国における女性を社会的抑圧から解放した歴史的経験』、P.25 と 201 より

S.ヤンジマーは 1893 年に D.パグマドラムと同じ、ウランバートル市マイマー・ホトに生まれた。写真の下には、「S.ヤンジマー（モンゴルの女性運動の最初のメンバー）」と書かれている。

S.オドバルは、1921年にボルガン県に生まれた。写真の下には、「S.オドバル モンゴル女性委員会の長、作家」と書かれている。

S.ヤンジマー⁵³とは、人民革命のリーダーの1人である将軍 D.スフバートル⁵⁴の妻である。モンゴル女性連盟の最初の代表は、D.パグマドラムであるが、その翌年に代表になったのが S.ヤンジマーで、1925～1928年、その後、1936～1938年、1940～1949年、1956～1962年に代表を務めている。その次に写真が大きい S.オドバルは、S.ヤンジマーが3度目の代表になった後の1949～1954年、その後 S.ヤンジマーが4度目の代表になった後の1962～1982年にかけて20年間代表を務めた人である。S.オドバルについて書かれた著

⁵³ ヤンジマーは、ネメンディ・ヤンジマーという姓名であったので、N.ヤンジマーと書かれていることがある（モンゴルでは、親のファーストネームを姓とし、自分のファーストネームの上につけて姓名を作る）。彼女は、夫スフバートルの死後、スフバートル・ヤンジマーを名乗るようになったので、S.ヤンジマーと書いていることもある。ここでは、ヤンジマー自身が選んだ S.ヤンジマーと書くことにする。

⁵⁴ D.スフバートルも、謎の死を遂げている。

作は多く、生誕 100 年を記念して映画“УЛАН ЦЭЦЭГ”（『赤い花』）が作られた。彼女は社会主義時代の女性リーダーとして真っ先に名前が上がる女性である。

一般のモンゴル人が、社会主義時代の女性のリーダーとして名前をあげるとしたら、この写真の 2 人だろうと思われる。この 2 人に強い光を当て続けることも、D.パグマドラムを日陰に置いて、見えない存在にすることに役立ったと思われる。

この『女性解放史』が出版される 1973 年までの間、モンゴル女性連盟の代表は、D.パグマドラム、S.ヤンジマー、S.オドバルの 3 人だけである。2 人は大きなサイズの写真が挿入され、最初の代表の D.パグマドラムの写真が挿入されていないのは極めて不自然である。前述のように、D.チメッドツェレンは、「モンゴルの女性組織の発起人で初代の課長 D.パグマドラムはモンゴルの女性運動の歴史に重要な位置を占める。」と明言しているにも関わらず、写真が一枚も挿入されていないのはおかしい。D.パグマドラムの写真を掲載しない唯一の理由は、粛清の対象となった事実であろう。E.チメッドツェレンと、編集及び検閲の背景となる国家権力との間で起こった何らかの争いは、その中身がわからなくても、不掲載という不自然さによって『女性解放史』に仕込まれていたのである。

(9) E.チメッドツェレンが挿入した D.ボンツァグの 2 枚の写真

もう 1 つ不自然だと思うのは、D.ボンツァグの同じ写真が 2 回使われていることである。



写真の下には、モンゴルの女性組織における最初の職員の女性たち、と書かれている。後ろの列の右から二番目の洋風のコートを着ているのが、D.ボンツァグである。この集合写真の上には、この D.ボンツァグだけを切り取った写真をもう一つ挿入している。写真 12 と同じ帽子をかぶっている。

先ほどの女性組織の代表2人以外は、1ページに3枚挿入するぐらいの小さいサイズの写真が使われている。しかし、D.ポンツァグだけは、集合写真とそれを切り取って大きくした写真というように2枚も使われている。それは、まるで、この本の中で、D.ポンツァグは重要な人物であることを示しているかのようである。

資料3の興味深いところは記述の方法である。最初の組織の代表は誰で、その組織は何をしたかという活動の歴史は6章で書いている。これを書くだけでも良かったところ、2章ではD.ポンツァグという最初の女性の大臣の証言をもとに、当時の暮らしぶりを目に浮かぶように記述していることである。

モンゴルで最初の女性の大臣がどのように生まれたか、ということは、この本の中で書かざるをえない。地方から都に流れてきた貧しい遊牧民のD.ポンツァグを家に住ませ、文字を教え、仕事に就けて社会に参加させ、党活動のリーダーとして育てたのは、D.パグマドラムとD.ナツァグドルジであった。D.ポンツァグは感謝と尊敬の気持ちを持ち、この2人と関わった人生を語っている。D.ポンツァグの重要な立場を盾に取ることで、D.パグマドラムらが社会のために真摯に生きる姿を再現し、記述として残すことに成功している。

(10) E.チメッドツェレンは『女性解放史』にD.パグマドラムを書くことによって、彼女を解放しようとした

このように見ていくと、E.チメッドツェレンは、史実と最初の女性の大臣D.ポンツァグの証言を使って、編集や検閲を論破した可能性がある。この結果、D.パグマドラムの写真の掲載が1枚も認められなくても、その功績を活字に残し、それがのちにD.ニャマーやKh.メンドサイハンらに引き継がれ、名誉回復に繋がったと言える。

知識人に対する粛清が続いている時期に、あえてD.パグマドラムについて書こうとしたのは、なぜか？ しかも、最後の著書にも繰り返して書いている。

それは、第1に、D.パグマドラムはモンゴル女性連盟の初代のリーダーであったため、誰が執筆者になったとしても、モンゴルの女性の歴史を書く時、書かざるにはおれない存在であった。E.チメッドツェレンは、党の建設史観⁵⁵を下敷きにして『女性解放史』の章立てを考えた⁵⁶が、第2章の「人民革命とモンゴルの女性たち」、第6章の「モンゴルの女性たちの組織」で女性の最初の組織の活動を書く時に、女性組織の代表が誰で、どのような問題を解決するために、どのように組織を動かして、運動していたか、と具体的に書くには、D.パグマドラムの名前をあげ、彼女が何をしたのか、ということから書く必要があった。他の執筆者であっても、自然にそうしたいと思ったことだろう。しかし、それを阻む政治の圧力とE.チメッドツェレンは闘ったのである。

2つ目は、E.チメッドツェレンが、日陰に置かれたD.パグマドラムを『女性解放史』の本の中で光を当てようとした理由は何か、ということだが、それは歴史家として書かざる

⁵⁵ 『女性解放史』は、人民革命党の建設史観にもとづきモンゴル科学アカデミーが『モンゴル史』三巻本を編纂し、1969年に発行した後、女性を主語にして書かれた歴史書である。人民革命50周年を記念して出版された。

⁵⁶ 詳細は、今岡良子「E.チメッドツェレンの最後の著書『モンゴル女性の知識の伝統と進歩の諸問題』を再考する」「アジア現代女性史」13号を参照されたい。

を得ないというだけでなく、D.パグマドラムを二度、しかも、自分の手で日陰に置かないという強い意志を持っていたのではないか、ということである。女性解放の運動の先頭に立ち、その後、政治的に粛清されたD.パグマドラムの偉業を書き残す行為は、一人の女性を解放することであった。それを書くことによって『女性解放史』の本に魂を吹き込んだ。筆者は、あらためて、この本の資料としての価値を再認識したところである。

今のところ、映像化された作品では、D.パグマドラムがD.ナツァグドルジの妻としての側面からではなく、女性解放の先頭に立って活躍した女性であるという描かれ方がされていない。しかし、E.チメッドツェレンの著作がある限り、いつか、描かれるだろうと期待する。

おわりに

E.チメッドツェレンの著作は読まれても、D.パグマドラムについて書かれたところは、無視されたり、忌避されたりしていたのかもしれない。著者であるE.チメッドツェレン自身も同様の扱いを受けていたのかもしれない。筆者がE.チメッドツェレンの女性史に興味を持っていると言うと、「マルクス主義の歴史観は古い」とか、「今はモンゴル帝国時代の王妃の研究が主流だ」とか、まともに取り合ってもらえず、様々な理由で興味を削ぐようなことを言われてきた原因は、ここにあったのかもしれない。

また、他にも、そういう女性が、この本の中に書かれているかもしれない。

<文献>

O.Батсайхан (2016) “Монголчууд : 1924–1959 онд” АДМОН принтинг (O.バトサイハン (2016) 『モンゴル人たち : 1924–1959年』アドモン社)

БНМАУ-ын Шинжлэх Ухааны Академи Түүхийн хүрээлэн (1969) “БҮГД НАЙРАМДАХ МОНГОЛ АРД УЛСЫН ТҮҮХ” : боть 3 (翻訳 : モンゴル人民共和国科学アカデミー歴史研究所 (1969) 『モンゴル人民共和国史』第3巻)

БНМАУ-ын Шинжлэх Ухааны Академи Түүхийн хүрээлэн (2004) Монгол улсын түүх : боть 5. 20-р зуун (翻訳 : モンゴル国科学アカデミー歴史研究所 (2004) 『モンゴルの歴史』第5巻)

Н.Гэрэлсүрэн, Д.Алтай (2008) “Монголын эмэгтэйчүүдийн байгууллага”, Улаанбаатар (翻訳 : N.ゲレルスレン、D.アルタイ (2008) 『モンゴルの女性組織』、ウランノールタル)

С.Мөнхжаргал, Д.Цэдэв, С.Лувсангомбо, Т.Жадамбаа, Я.Шархүү (2007) Улаанбаатар : Хотын хөгжил, АДМОН принтинг (S.ムンフジャルガル他 (2007) 『ウランノールタル : 都市の発展』アドモン社)

Х.Мэндсайхан (2021) “Пагмадулам”, Мөнхний Үсэг хэвлэлийн газар (翻訳 : Kh.メントサイハン (2021) 『パグマドラマム』、永遠の文字印刷所)

Д.Нямаа (2009) “Их Д.Нацагдоржийн гэргий Пагмадуламын амьдрал, аж төрөл”, УБ (翻訳 : D.ニヤマー (2009) 『文豪ナツアグドルジの妻パグマドラマムの人生』)

Э.Чимэдцэрэн (1973) “БНМАУ-д ЭМЭГТЭЙЧҮҮДИЙГ НИЙГМИЙН ДАРЛАЛААС ЧӨЛӨӨЛСӨН ТҮҮХЭН ТУРШЛАГА”, УБ (翻訳 : E.チメッドツェレン (1973) 『モンゴル人民共和国における女性を社会的抑圧から解放した歴史的経緯』)

Э.Чимэдцэрэн (1983) “Монголын эмэгтэйчүүдийн мэдлэгийн уламжлал дэвшлийн зарим асуудал” УБ、(翻訳 : E.チメッドツェレン (1983) 『モンゴル女性の知識の伝統と進歩の諸問題』)

Ц.Цэцэгжаргал (2009) “Монголын эмэгтэйчүүд. XX зуунд : хувьсал, өөрчлөлт”, УБ (Ts. ツェツェグジャルガル (2009) 『モンゴル女性の20世紀 : 変容と変化』)

今岡良子 「E.チメッドツェレンの最後の著書『モンゴル女性の知識の伝統と進歩の諸問題』を再考する」 『アジア現代女性史』13号

今岡良子 「2つの三世代の『秘史』—E.チメッドツェレンの『三世代の歴史』と息子のJ.ボルの『私の母 思い出し』」 『アジア現代女性史』14号

今岡良子 「モンゴル国の番組『100年の100人の女性たち』の中のE.チメッドツェレン」 『アジア現代女性史』15号

- 岡田和行 (1983) 「ダシドルゼーン・ナツアグドルジと「わか故郷」」、「東京外国語大学論集」第33号
岡田和行 (1991) 「反逆の詩人レンチニー・チョイノム」 「東京外国語大学論集」第42号
岡田和行 (2006) 「ナツアグドルジの1932年の投獄と獄中詩について」 「東京外国語大学論集」第72号
岡田和行 (2009) 「ツェンディーン・ダムディンスレンと「知識人の迷妄」をめぐって」 「東京外国語大学論集」第79号
芝山豊 (2005) 「D. ナツアグドルジ「黒い岩」をめぐって」 「モンゴル研究」22号
芝山豊 (2007) 「D. ナツアグドルジの手稿「黒い岩」のデジタル解析」 「モンゴル研究」24号
南満洲鉄道株式会社庶務部調査課 編 (1927) 『外蒙共和国』 大阪毎日新聞社

<映像資料>

芸術映画 'Саруул тальн ерөөл' (「輝く草原の祝詞」) 1984年制作。監督R. ドルジシラム、D. ナツアグドルジ役: D. グルセド、D. パグマドラム役: S. サラントヤー
<https://www.youtube.com/watch?v=TRERuWDTTg&t=1010s>

テレビドラマ "Их Нацагдорж" 『文豪ナツアグドルジ』 2007年に国営放送のカラー放送40周年記念番組として制作された。監督G. ジグジドスレン、D. ナツアグドルジ役: Sh. ビャンハツォグト、D. パグマドラム役: B. バトソミヤ <https://www.youtube.com/watch?v=5z1GqRyt0IU>

芸術映画 'Харанхуй хад' (「黒い岩」) 監督B. ツォグトバヤル、D. ナツアグドルジ役: G. バヤルフー、D. パグマドラム役: E. プレブジャルガル 2016年劇場公開
<https://www.youtube.com/watch?v=-t1XsQBz04>

教養番組 "Д. Пагмадулам. Бүрхэг шөнийн тэргэл саран" (翻訳: 「D. パグマドラム。曇った夜空の満月」) 2016年に放送された。 <https://www.youtube.com/watch?v=EuQk79u-054&t=2029s>

教養番組 "Зууны 100 эмэгтэйчүүд" (「モンゴルの100年の歴史を創った100人の女性たち」) 「光を見て、光り輝いた純白の真珠D. パグマドラム」 2021年放送
<https://www.youtube.com/watch?v=BseJd2voId4>

<インターネット上の新聞情報>

П. Бадрч, "Шанзны эгшигнээс тасарсан дусал хар нулимс" (P. バダルチ「シャンズ(三味線)の音色から溢れた黒い涙

<http://soronzon.blogspot.com/2009/07/blog-post_18.html> 2009年7月18日付けソロンボン紙

"Бүрхэг шөнийн тэргэл саран" (「曇った夜空の満月」)

<<http://time.mn/k0n.html>> 2016年11月17日付 タイム紙

Д. Нацагдоржийн гэргий Д. Пагмадуламын эмгэнэлт тавилан (D. ナツアグドルジの妻D. パグマドラムの悲劇的な運命) <https://www.tolgoilogch.mn/_1nf22aqrw3> 日付不明 歴史紙

Д. Пагмадуламын тухай онц сонирхолтой роман бичжээ (D. トウルバト 「D. パグマドラム」という小説を書いた) <<https://news.zindaa.mn/2ctf>> 2018年5月7日付 ジンダー紙

Зохиолч Д.Нацагдорж, Д.Пагмадулам нарыг тагнуулын ажилд ашигласан уу (作家D.ナツァグドルジ, D.パグマドラムらを諜報員として利用したのか) <<http://time.mn/o3Q.html>> 2020年2月27日付
タイム紙

X.Мэндсайхан : Д.Пагмадулам Монголын бүсгүйчүүдийг эрх чөлөө рүү хөтлөгчдийн нэг (Kh.メンドサイハン : D.パグマドラムはモンゴル女性に解放するリーダーの一人である)
<<https://amjilt.news/32855>> 2020年3月12日付 アムジルト紙

Их зохиолч Д.Нацагдорж, түүний гэргий Д.Пагмадулам нарын хөшөөг бүтээв (偉大なる作家D.ナツァグドルジ、その妻D.パグマドラムたちの銅像を建立した。)
<<https://www.montsame.mn/jp/read/231064>> MONTSAME 2020年7月10日付 モンツァメ紙

1924 он : Монголын эмэгтэйчүүдийн холбоо байгуулагдсан түүх (1924年:モンゴル女性連盟を設立した歴史)
<<https://www.sonin.mn/news/culture/123359>>2021年8月2日付 ソニン紙 (ゾーニー・メデー紙)

Анхны үндсэн хууль батлалцсан эмэгтэй Д. Пагмадуламыг цагаатгалаа. (最初の憲法の制定に加わった女性D.パグマドラムの名誉を回復した。) <<https://ardmedee.com/24150/>> 2021. 12. 22日付
アルド・メデー紙